

草津市立矢倉小学校通信 令和2年4月30日 NO.2



# やぐら通信

～ひとみキラキラ豊かな心と体の矢倉っ子～

## 人を元気にさせる心づかい、心の絆

休校が繰り返し延長されるたびに、いつまでこんな状況が続くのだろうか…と、心が折れそうになる。保護者、地域の皆さんの一層の負担感も伝わってくる。何より子どもたちは、もっとつらい毎日を送っているに違いない。医療関係の方々にも頭が下がる。身の危険にさらされながら、第一線で私たちの命と健康を守るために力の限りを尽くしてくださっているからだ。だから自分だけがしんどいのではないと受けとめようとするのだが、どうかすると心が沈んでいる自分に気づく。そんな中、ちょっとした心づかいが明るさをもとすことにつながったというできごとがあった。

「庭にたくさん咲いていたから持ってきました。こちらの花瓶に生けておきますね。」この春、退職された小幡先生がチューリップを持参してくださった。生けられたチューリップは、沈鬱な校長室に春の光と風を呼び込んだ。3月初めの臨時休校宣言以来、ずっと真っ暗闇のトンネルを歩んできたと感じていた私も、今は春なんだと心が弾んだ。子どもたちの声がにぎやかに響いていることが、あたりまえのことにように受け止めてきただけに、ふわっと明るくなれた瞬間だった。

新しく赴任された堀江教頭先生は、宿根ガザニアの「マンゴープリン」というおいしそうな名前の花を職員室の窓際で育ててくださっている。気ぜわしい職員室だからこそなくてはならない心遣いだ。

休校中、ふらりと学区を自転車で巡ることがあった。「子どもたちはどうしているかなあ。」と気になって…というよりも、「子どもと出会いたい。」というのが正直な思いからのことだ。家の中から、はずんだ声が聞こえてくるだけで幸せな気持ちになれるから不思議だ。玄関先に自転車が無造作に停められているのをみると、どうか早く気軽に自転車で出かけられますようにと祈りたくもなってくる。ポスティングに回る先生たちもきっとこんな心地になっているだろう。

マスクがなかなか手に入らない困った状況は、人と人とのつながりを確かめ合える状況とも言える。どれほど互いのことを思いやれるか、その絆の強さが困った問題を乗り越えさせてくれる原動力となる。学区にお住まいの、むかし呉服屋をしていたという方から晒（さらし）が届けられた。しばらくすると、それをもとに手持ちの布地も持ち寄って手作りマスクがたくさん作られ、学校へ持ち込まれた。これまでずっと学校ボランティアとして、子どもたちのことを支えてくださっているグループの心遣いである。

手作りマスクについては、こんなこともあった。人事異動で転退職される先生たちは、いざという時の子どもたちの助けに少しでもしてほしいと、年度末のあわただしい中、その日の仕事に一区切りつけては、夜遅くまで残って、学校のミシンでマスクをつくってくださっていた。

コロナは、あたりまえのことを、あたりまえにさせてくれない。そんな中で、これまでなら見過ごしてしまっていたような、なんでもないことが、実はとてもすばらしいこと、かけがえのないことだということに気づかされると、不思議と元気になれる。免疫力が高まったように感じられる。

コロナにやられないための免疫力は、一人ひとりの体力だけの問題ではない。花を生ける、声をかけあう、マスクづくりに奔走する…こうした人と人とのつながり、地域社会の絆がとても大切な免疫力だと思えてくる。

校長 大林道範